

宮城県志津川町へのコアホウドリ

*Diomedea immutabilis*の迷行

佐藤広巳

1985年8月9日正午頃、宮城県本吉郡志津川廻館の中学校上空を、コアホウドリらしい鳥が西方方面へ飛去したと、同校の生徒で志津川愛鳥会会員の佐藤憲二君より連絡があった。そのため10・11日に、筆者等が同町の海岸線を探したが発見できなかった。ところが、12日になって、同町入谷秋目川（海岸線より約3km内陸）の住人より、付近林道を歩いてきた大型の鳥を保護したと言う旨の連絡があった。同日夕方、同町の傷病鳥救護所のような形になっている田中医院に届けられたその鳥は、成鳥のコアホウドリであった。一見したところ外傷は無く元気であったが、体重が軽く（最低4日間は絶食状態にあったと思われる）。その為2、3日ようすを見ながら、放鳥方法を検討する事にした。12、13日は会員で志津川愛鳥会会長の三浦孝夫氏が預り、その間鰹の刺し身10切程を食べ、不透明な白い液状の糞をした。連日の30℃をこす猛暑で鳥が弱まるのを懸念し、早い機会に放鳥することにした。そのため少しでも風を得られる所を探したが、都合のよい広い傾斜面は見あたらず、結局14日午前、同町入谷の牧草地斜面で放鳥を試みた。しかし離陸に十分な風を得られず、2、3回空中に放ってみたが、飛ぼうとするようすは全く見せず失敗に終わった。

野鳥関係者の意見を聞き、外洋で放鳥するのが、最良と思ったものの、お盆の期間中もあって、近日出港予定の魚船は見つからなかった。そのため、14日から筆者がこれを預り飼育することにした。餌は鰹の刺し身と小サバの切り身を、朝晩の2回水とともに与えた。水は細口の瓶を使い、上から流して吞ませたが、下嘴で器用に受けとめ吞み下した。保護当時は、割り餌で給餌したが、その後比較的早く筆者等に慣れ、切り身を嘴の前にぶら下げると、自ら食いつくようになった。しかし一回の食事で4切れ程度で、しかも食べさせるのには、かなり根気がいった。そのため人手がある時はなるべく割り餌で与えた。暑さがひどいので、毎朝、庭を散歩させながら、ホースで水浴びさせたが、餌よりも水を吞む方を喜ぶようだった。夜間や朝方、クゥーと一声鳴く事がよくあり、同時に頭を上下させて体を左右に揺すったり、嘴をカタカタ鳴らしたりした。この動作は朝方によく行った。16日に放鳥に備えて足環を装着したが、その後、動きが活発になり、頻繁に羽博きをし始め、ダンボール箱内で暴れるようになった。

同日漸く、気仙沼港を17日に
出港予定のハボマイ行き魚船と、18
日に気仙沼港を出港の太平洋フェ
リーの客船とが、別ルートで見つ
かり話合いがついたが、結局前者
に放鳥を依頼することにした。根
室船籍の「第十六大洋丸」100t
で、志津川町在住で鳥好きの漁労
長佐藤源六氏が心良く放鳥を引き
受けてくれた。その後同船より無
線で放鳥状況など詳しく知らせ



図1. コアホウドリ(小塊雅之 撮影)。

くれた。以下の1～4まではそのデータである。

1. 放鳥日時：1985年8月18日，9時20分
2. 放鳥場所：N40°36′，W143°19′，八戸沖約100km.
3. 天候：晴れ，気圧1010mb，水温22°C
4. 放鳥時の状況：岩手県沖の海鳥が大群で群れている場所を狙って放鳥したが水面に着水。視界から消えるまで，双眼鏡で追ったが，飛び上がらなかった。

仙台気象台の気象観測船の調べを補足すれば，同日同刻この付近は寒冷全線通過中で，観測点N40°36′，W143°19′における風向はSSW，風速は5 m/sとのことである。このコアホウドリが迷行する直前の8月7日～9日に台風8号が九州から東シナ海に抜けているが，東北地方はほとんどその影響は受けなかった。同気象台の調べでは，7日の志津川沖300kmでは，南南西の風が7.5m/sで，15：00に12.5m/sになったものの，8日早朝以降は南風となり，5 m/s以下になった。志津川沖30km以内では，最大瞬間風速が3～4 m/s程度であり，この迷行に風の影響があった可能性は低いと思われる。

なお，コアホウドリは，三陸沖合では数少ないものの，普通に観察できる鳥である。しかし陸上への迷行例は少い。陸上の記録としては，県内では，1970. 12.，12の気仙沼市での例（田中 1982）と，迷行ではないが，1970. 7. 19. 仙台市南蒲生海岸での死体（蒲生鳥類グループ 1972）の2例がある。（なお，未確認であるが，女川で2例保護放鳥したという話も聞いている。）

このコアホウドリに装着した足環と，同固体の計測値を下に示した。

1 足環，タグ

- 1) 足環：右脚，環境庁Japan120-00517
私製足環：黄色のビニル製のリング，Jap1985-8と記した。
- 2) タグ：左の次列風切と三列風切の間に黄色のビニル製タグ。

2. 計測値（8月14日）

- 1) 露出嘴峰 105.5mm
- 2) 会合線 100.04mm
- 3) 鼻孔前縁～嘴先端まで 70.97mm
- 4) 嘴高 22.0mm 5) 跗蹠 95.5mm
- 6) 尾長 139.3mm 7) 翼長 49.0cm
- 8) 翼開長 98*cm×2（生体に付誤差あり）
- 9) 全長 68*cm（同上）
- 10) 体重 1.5kg～2 kg（8月14日時点，人間用の体重計に鳥を抱えて計測）なお，放鳥に際しては，第十六大洋丸の佐藤源六漁労長の多大なりご協力を頂き，また日時の関係でこれを使用できなかったが，太平洋フェリーに放鳥を依頼する件で，ウトナイ湖サングチュアリの安西英明レインジャーと，これを快諾してくれた同社の大沢則義船長にもご協力頂いた。厚く御礼申し上げる。

文 献

- 蒲生鳥類グループ 1972 蒲生海岸の鳥類，蔵王山・蒲生干潟の環境破壊による生物群衆の動態に関する研究 I（吉岡邦二編）122pp.
- 田中完一 1982 野鳥は空に花は野に——南三陸鳥類目録——著者出版407pp.

CAPTURE AND RELEASE OF THE LAYSAN ALBATROSS
DIOMEDEA IMMUTABILIS IN SHIZUGAWA

HIROMI SATO

On 12th August, 1985, an adult Laysan Albatross *Diomedea immutabilis* was captured accidentally on a timber road about 3 km inland from the Pacific Ocean in Shizugawa Miyagi prefecture. As the bird seemed to be exhausted, the auther fed it with raw fished for five days. Afterwards, the bird was put on a fishing boat on 17th August and released on 17th August and released on the Pacific Ocean (40° 36' N, 143° 19' W) bearing a metal ring lettered "Japan 120-00517".

64 Tokamachi Shizugawa-cho, Miyagi 986-07

1985年10月3日 受理

1. 〒986-07 宮城県本吉郡志津川町十日町64。(宮城県支部)

能登半島における
マヒワ *Carduelis spinus* 家族群の観察

美馬秀夫¹・時国公政²・国盛孝昭³

マヒワ *Carduelis spinus* は、日本産アトリ科のなかで最も小さい鳥で、多くは冬鳥として秋に渡来し、数羽から数十羽の群れで生活し、春に北方へ渡去する。北海道では少数が繁殖することが知られている(清棲 1965, 藤巻・川辺・飯嶋 1980, 日本野鳥の会 1980, 高田・黒沢・三浦 1981)。しかし、本州以南では繁殖記録はきわめて稀であり、巣立ち後の幼鳥を認めた中西(1979), 湯浅,(1953), 清棲(1965), 交尾を観察した黒田(1948), 繁殖期のさえずりを記録した日本野鳥の会(1980)などがあるにすぎない。

今回、筆者らは能登半島の柳田村で、巣立ち後間もない幼鳥を含むマヒワの家族群を観察したので報告する。

マヒワの家族群を観察したのは、1985年8月16日、25日、28日の3回である。

観察場所は、石川県鳳至(ふげし)郡柳田村合鹿(ごうろく)地内、能登半島の先端に近い丘陵地で、現在、柳田村植物公園(仮称)として整備中の区域の一角である。3日とも、ウメヤモモ、サクラの若木が植栽されている草地の周辺で見られた。標高は約200mで周囲はアカマツ林、コナラ林、水田となっている。

8月16日には、美馬と国盛が、マヒワ成鳥♂1羽と巣立ち後間もない幼鳥40羽を確認した。他に、マヒワ♀ではないかと思われる成鳥1羽をみたが確認できなかった。幼鳥は成鳥と行動をともしていた。当日は、双眼鏡を持っていなかったため、肉眼での短時間の観察であるが、7~8mの距離で見ることができたので、幼鳥は小さく、大ききで明ら